

看護の人間学（1）  
～看護師に求められる人間性～

荒 井 優

Masaru ARAI : Anthropology of Nursing (1)  
～Humanity Required for Nurses～

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第72号 抜刷

2015年12月

## 看護の人間学(1) ～看護師に求められる人間性～

荒 井 優<sup>1</sup>

Masaru ARAI : Anthropology of Nursing (1)

～Humanity Required for Nurses～

看護師は、「療養上の世話」を業務の主軸として、患者やその家族と人間的に良好な関係づくりを求められる。そのような看護師に求められる人間性とは何か？ ここでは、「挨拶」、「人が好き」、「寄り添う」に焦点を当て、それらが心理的・精神的な存在としての人間にとってどのような意味をもつのか？ またどのようにしてそれらの資質を獲得することができるのか？ こうした問題を、いくつかの学説・理論にもとづいて解明し、根拠づけていこうとする。

キーワード：「挨拶」「欲求5段階」「人が好き」「ライフサイクル」「寄り添う」「傾聴」「アクティブ・リスニング」

### 1. はじめに～看護師の業務とは

現在、私は大学において入試広報部長として学生募集の職務を負っている。進学説明会やキャンパス見学会などにおいて、将来看護師をめざそうとする高校生に接する機会が多い。そんな高校生たちに、あえて「看護の仕事って、どんなことだと思いますか？」と質問する。すると、きまって「お医者さんの診察の補助」という答が返ってくる。たしかに、私たちが患者として病院や医院を訪れたとき、看護師は医師の指示にしたがって包帯を巻いたり、注射・採血・点滴をしたり、医療機器の操作、手術後の対処などを行っている。こうした光景を目の当たりにしているから、高校生たちが見る看護行為とは医療行為に補助的に関わる技術的介助として捉えられてしまう。人間性や、ましてや人間関係力の必要性など念頭に浮かんでこない。しかし、看護師が実際に行う業務は、診療の補助だけではない。むしろ、それ

以上に重要な業務がある。

厚生労働省の「保健師助産師看護師法」（いわゆる「保助看法」）第5条<sup>1)</sup>には、看護師に求められる業務が規定されている。「この法律において「看護師」とは、厚生労働大臣の免許を受けて、傷病者若しくはじょく婦に対する療養上の世話又は診療の補助を行うことを業とする者をいう。」ここに、看護師の業務は、①療養上の世話と②診療の補助の2つからなることが明記されている。「診療の補助」とは、採血、静脈注射、点滴、医療機器の操作、患者に対する処置などのように、比較的軽微な医療行為の一部について補助的に行う業務であり、かならず医師の指示のもとに行われる。しかし、看護師の本来の第一の業務は「療養上の世話」であると、上記の「保助看法」第5条は記している。「療養上の世話」とは、たとえば患者の症状についての観察、食事の世話、身体の清拭、排泄の介助、入浴の介助、健康や生活全般にわたる見守りや助言・サポートなど、日常生活の援助である。これらは、医師の指示を必要とせず、看護師の主体的な判断のもとに行われる。またさらに、患者の病状が重篤で、たとえば

1 鳥取看護大学看護学部看護学科

末期ガンのような危機的な状況となると、患者はもちろん、家族に対しても精神的・心理的にサポートしなければならない。

こうしてみると、看護師が負うべき主たる職務は、「患者の療養上の世話」と、それに伴う患者および家族の精神的サポートであることがわかる。

くわえて、近年の医療の高度化・専門化・複雑化が進む中で、医療はかつての医師を中心としたピラミッド型医療からチーム型医療へと変化している。そのために、「療養上の世話」を本来的業務とする看護師が、新たなチーム医療の中核を担う責任者として期待されている。

看護師は、「患者の療養上の世話」を職務の主軸として、患者やその家族と円滑かつ迅速なコミュニケーションをとることが求められる。さらに、それだけにとどまらず、今後、医療の重心が病院医療から在宅医療へと変化するのであれば、チーム医療の中心的なキーパーソンとして、チームを円滑にまとめるための人間関係力が求められる。

本稿では、看護師に求められる人間性、人間として看護師だからこそ求められる人間性とは何かについて考えてみたい。

## 2. 人間関係の基礎～挨拶

挨拶が日ごろの社会生活を営むうえでとても重要な行為であることは、誰もが認めている。しかし、挨拶がなぜ必要なのか、挨拶そのものにどれほどの存在論的意味があるのか、こうした問題が理論的に解明されることはほとんどない。少なくとも、私の知るかぎり、挨拶をまじめに論考した哲学者はいなかったように思う。

ここでは、かつて実際に起こった出来事<sup>2)</sup>にそって、挨拶の意義について掘り起こしてみようと思う。

今から約20年ほど前のこと、東京のある女子短期大学で授業崩壊が起こった。いや、もっと端的に言えば、学校崩壊ともいべき事態が起こった。私語によって授業が成り立たないというだけではな

く、学園生活そのものが秩序を失って崩壊の危機に瀕したのである。

きっかけはタバコであった。学内禁煙であるにもかかわらず、教室移動の際の「くわえタバコ」、校舎から窓外へのタバコの投げ捨て、教室はタバコ煙の臭いが蔓延し、キャンパスは吸い殻だらけ。通学路は吸い殻の散乱。近隣住民からの苦情は後を断たなかった。学生の半数がタバコを吸っていた。大学は都会の繁華街に隣接しており、学生たちの一部は繁華街のバーやクラブで夜アルバイトをしていたために、喫煙習慣が身につけてしまったのである。こうした教育環境の悪化によって、善良な女学生が相次いで退学する事態にまでなった。教職員が喫煙中の学生に注意をすると、逆に睨み返され、這々の体で逃げ帰るというブザマな状況であった。教員は授業中に喫煙学生を叱責することもできず、授業管理すらできなかった。

こうした事態を一掃しようと、大学学生部が「禁煙運動」に立ち上がった。未成年女子たる短期大学生の禁煙を徹底させようと、学内の全教員に呼びかけた。夏休みまでの2ヶ月半は、教員対策・教員説得に終始した。これが最もエネルギーを要したという。夏休み中に、ほぼ全教員から協力体制を得た。

後期が始まる10月1日、いよいよ禁煙運動の実施を開始した。禁煙を呼びかける大立看板、ポスター数百枚を、廊下のすべての壁に隙間なく貼った。校内に設置したテレビで、禁煙のビデオを上映。大学の広報誌には、キャンペーンを連載し、月2回発行。毎日昼休憩には、学長以下教員のメッセージを学内に放送した。トイレには煙センサーを設置。やがて1ヶ月がたって、学友会の学生が立ち上がった。続いてクラブの学生たちが立ち上がり、放送メッセージに参加した。そして、禁煙運動を開始して2ヶ月がたって、学内環境が一変した。

いったい、何が起こったのか？ 学園内に自然発生的に挨拶が生まれたのである。学生と教職員が行き交う際に、「おはよう」「こんにちは」という挨拶が交わされるようになった。学生と学生のあいだで、

教職員と教職員のあいだで、声かけの一言が自然発生的に広がっていった。たったそれだけの変化であるが、学園内には親密で明るいコミュニケーションが生まれた。そして、学生と教職員のあいだに、信頼関係が復活した。信頼関係が生まれたことによって、学園生活のすべてにわたって、マナーの改善が生まれた。教室内においても、コミュニケーションが生まれ信頼関係が生まれたことによって、授業が成立するようになった。授業中の充実したやりとりが生まれたことによって、教員の姿勢にも変化が生じた。研究ばかりに没頭していた教員が、教室の中でしか学生に接しなかった教員が、教室外でも学生との交流に時間を費やすようになった。喫煙学生はゼロにはならなかったが、学園内の秩序は完全に回復した。

授業崩壊の元凶はタバコではなかった。タバコはきっかけだった。元凶は対話の欠如にあった。人と人との信頼関係、心と心のつながりは、行き交うときの挨拶や何げない声かけから始まる。それは「コミュニケーションの扉を開けていますよ」というサインなのだ。コミュニケーションや対話の土壌がしっかりしていれば、教育環境や人間関係でも、そこにいる安心感や心地よさが生まれる。たとえ、問題が起こったとしても、秩序崩壊をきたすほどの大きな問題にはならない。対話の糸がつながっていることが、円滑な人間関係、正常な教育環境の前提なのである。授業外でも、学生たちと他愛ない雑談をすることが、実は教育環境を整えるという意味では非常に有意義なひと時なのである。

### 3. マズローの「欲求5段階」論と挨拶

アメリカの心理学者アブラハム・マズロー (Abraham Harold Maslow, 1908-1970) は、「欲求5段階」論でよく知られている。彼は1943年に論文「人間のモチベーションの理論」(A Theory of Human Motivation) を発表し、初めて「欲求5段階」論を提唱した。これをさらに発展させた著書が

1957年刊『モチベーションとパーソナリティ』(Motivation & Personality, 邦訳『人間性の心理学』) である。この学説は1960年代には心理学・心理療法の分野で確たる地位を確立した。その後、経営学や看護学においても有用な学説として活用されている。

私たちはマズローの欲求段階説において挨拶がどのような位置にあるのか、人間のどのような欲求充足に対応するのか、ということを見てみたいと思う。

マズローは人間の心理的・精神的成長を「欲求」(Need) の成長段階として分析している。人間は1つの欲求が満たされるとより高次の欲求を求めようとし、このような欲求充足を遂げることによって心理的・精神的に成長していく。低次の欲求はすべての生きとし生けるものに共通する欲求であるが、高次になればなるほど生物進化的に発展・成長し、最後は人間固有のものとなる<sup>3)</sup>。

マズロー自身はこうした欲求段階の図を示していないようだが、マズロー『完全なる経営』(Maslow on Management) 中の監訳者解説のページに欲求5段階の図<sup>4)</sup>があるので、下に載せておく(図1)。

第1段階は「生理的欲求」<sup>5)</sup> (Physiological Need) と呼ばれる。食べ物・飲み物・空気への欲求、睡眠や排泄の欲求など、人間はもちろん、すべての動物にとって生存維持のために最低限に満たされなければならない本能的欲求である。

「生理的欲求」が満たされると、私たちの欲求は

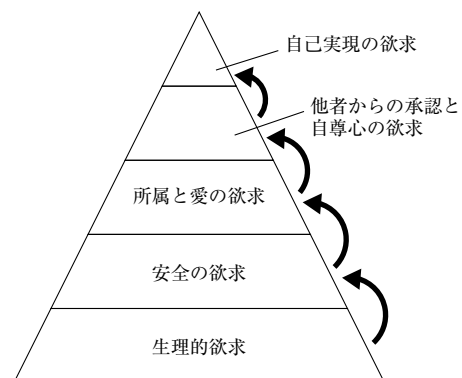


図1 欲求5段階説の図示 (『完全なる経営』監修者金井壽宏)

第2段階「安全の欲求」<sup>6)</sup>(Safety Need)へと上昇する。雨・風をしのぐ住居が持てること、暴力や犯罪などの危険から守られていること、経済的に安定した生活、健康で平和な生活を求めようとする欲求である。これら2つの段階の欲求は「物質的」欲求として特徴づけることができる。「生活のために、お金のために働く」という動機づけは、これらの段階のものである。

「生理的欲求」と「安全の欲求」が十分に満たされると、新たな欠乏感に襲われる。このとき私たちは、友人や恋人がいないこと、妻や子どもがいないこと、そして寄り添ない根無し草となっている自分の孤独を痛切に感じる。この精神状態が第3段階の「所属と愛の欲求」<sup>7)</sup>(Need for Love & Belonging)である。この段階では、私たちは、会社、家族、地域、国家など、ある社会、ある集団、あるグループに所属して、生存の孤独感や疎外感を克服しようとする。

「所属と愛の欲求」が満たされると、私たちの欲求は第4段階の「承認の欲求」<sup>8)</sup>(Esteem Need)へと上昇する。それは家庭においても社会においても、自分を価値ある人間として認められたい、自分の存在を承認してほしいという内面的な高次の欲求である。職場の上司から自分の仕事ぶりをほめられたり自分の体調などを気づかってもらったりすると、自分の中にある「承認の欲求」は満たされる。反対に、自分の仕事が会社に貢献したにもかかわらず、何の賞賛も得られないとき、私たちの「承認の欲求」は満たされない。マズローはこの「承認の欲求」段階を2つの階層に分けている。「他者承認」と「自己承認」(自尊心・自信)である。

これら4つの欲求が十分に満たされると、最後の第5段階「自己実現の欲求」<sup>9)</sup>(Need for Self-Actualization)が現れる。それは人間が本来持っている「自己充足への欲求」、すなわち「人がより自分自身であろうとし、なりうるすべてのものになろうとする欲求」<sup>10)</sup>である、とマズローは述べている。しかし、このような自己実現を遂げた人物とは、具

体的にどのような人物なのかと問うと、マズローは具体的な人物像のイメージを与えていない。この点については、今日でも盛んに議論されているが決着はついていない。私は、自己実現を遂げた人物として、たとえば仏陀やソクラテスのような宗教的あるいは哲学的偉人はもちろん、スポーツや学問、芸術などの諸分野で道を極めた達人なども、さらにはヴィクトル・フランクルが言う「人生の意味」を充足して人生を全うした無名の人たちも、自己実現を遂げた個人であろうと考えたい。

マズローによれば、「自己実現の欲求」以前の4つの欲求はそれぞれ自分に欠けている要素(生理的本能・安全・所属・承認)を補償し満たそうとする欲求であり、それゆえこれらは「欠乏欲求」<sup>11)</sup>と名づけられている(「低次の欲求」とも言われる)。これらの欲求が著しく満たされない場合は、その人の心理的な健康が損なわれ、時には重大な精神疾患となる。それに対して、「自己実現の欲求」は高次の「成長欲求」<sup>12)</sup>であると、マズローは説明している。欠乏欲求が「コップに水を満たす」ようなものだとすれば、この自己実現欲求は「コップから水が溢れでていく」ようなものであると、ある人は喩えている<sup>13)</sup>。

マズローの欲求段階論について一瞥したうえで、すれ違いざまに交わす「挨拶」とは、いったいどのような欲求段階にあるのか、またどのような意義をもつのか？ マズローは挨拶について一言も言及していないが、しかし私たちは、明らかに挨拶を「承認欲求」という段階に位置づけてよいと思う。

先ほど、挨拶は「コミュニケーションの扉を開けている」というサインなのだと説明した。その挨拶をマズローの欲求段階論の中で捉えなおしてみよう。挨拶に「承認の欲求」を満たす機能があるとしたら、挨拶とは「相手の存在を認める」というサインを意味することになる。

日本のビジネス業界において、とくに職場環境や職場管理の改善を行おうとすると、マズローの「欲求5段階」論の中の「承認の欲求」に熱い注目が注

がれている。その中の1つ、青木裕『成功するITマネージャーの「人づきあい術」』（IT media エンタープライズ）は、「承認の欲求」を「行動承認」と「存在承認」の2種類に分類している<sup>14)</sup>のが、大変に興味深く参考になる。

マズローの欲求段階論に当てはめれば、社員を大事にしない企業とは「安全の欲求」（リストラの不安・給与の遅滞）と「承認の欲求」（評価の欠如・人間尊重の欠如）が満たされていない状況にある。企業は各従業員の「承認欲求」を満たすことに気を配れば、それだけでも職場環境は一変するはずである。

「承認欲求」が満たされれば、各従業員はそれぞれの「自己実現」に向けて、より生産的な仕事に励むことになる。仕事をする事そのことが、個人として成長していきたいという思いにそのままつながる。

青木裕は「承認とは、相手に自信をもたせ、自発的な成長を促すという目的で行う行為である」<sup>15)</sup>と説明している。その中の第1の「行動承認は、相手が起こした行動に対して何かを伝える行動である」<sup>16)</sup>という。具体的には、ほめる、叱る、評価する、表彰する、ねぎらう、お礼を言う、謝罪をする、アドバイスをする、フィードバックをする、といった行動をあげている。それに対して第2の「存在承認は、相手がそこにいるという存在自体を認めることを伝える行動である」<sup>17)</sup>という。たとえば、挨拶をする、名前を呼ぶ、変化に気づく（髪型が変わった等）、声をかける、目を合わせる、役割を与える、共感する、家族・誕生日・趣味などを覚えている、相談する、といった行動である。この「承認」に満ちた人間関係づくりは、心がけ次第で簡単にできる行為であり、しかも何のコストもかからない。しかし、これらの積み重ねが職場に大きな効果を生む。良い職場とは、仕事をする事がそのまま自分の成長につながる、そんな仕事を可能にする環境である。そのとき、仕事は生きがいとなり、生きる喜びとなる。

挨拶は、もしもマズローの欲求段階論に当てはめるなら、第4段階「承認の欲求」、とくに「存在承認」を満たそうとする行為である。周りの人たちに挨拶

するということは、その人たちの存在を認めているという意思表示である。周りの人たちの存在を認めると、周りの人たちも自分の存在を認めてくれる。そして、職場に明るく爽やかな雰囲気醸し出され、そこから円滑な人間関係が生まれてくる。職場や教育現場では、見過ごされがちな挨拶であるが、人間関係における挨拶の根源的な意味を忘れてはいけない。

#### 4. エリクソンの「ライフサイクル」論 ～「基本的信頼」

進学説明会で、「看護師になるのにふさわしい適性は何ですか？」と高校生や家族に尋ねられることがよくある。同行する看護師の教員は、かならず口を揃えたように、「人が好き」な人ですと答える。インターネットの看護関係のサイトにも、やはり口を揃えたように「人が好き」という答が返ってくる。「看護職者になるには、人が好きで、人に興味があって、人の生き方に興味があれば、素質は充分です。」<sup>18)</sup>「看護師の方たちに、なんで頑張れるのか？」という質問をしてみたところ、多くの方が、人が好きで、誰かの役に立てるのが嬉しい……という回答をしていました。<sup>19)</sup>「看護師に向いているのは人と接することが好きな人です。」<sup>20)</sup>

たしかに、高齢者の身体の清拭、食事や排泄の介助など、「療養上の世話」を本来の職務とするかぎり、「人が好き」「人に接するのが好き」ということが看護師になる適性の第1条件となるのは納得できる。

私事で恐縮だが、私の専門分野は哲学・宗教学である。そんな私は「人が好き」ではない。そして私の妻は看護師である。彼女は「人が好き」である。

「人が好き」ではない私と「人が好き」な妻との違いは、実に明確である。「人が好き」という心優しい妻は、たまたま隣りにいる見知らぬ人から親しそうに話しかけられることがしばしばある。誰とでも親しく会話ができて、誰とでも「仲良し」になることができる。「人が好き」ということは、誰とでも「仲良し」になれるということだと、私は思っている。

そして、「人が好き」な人と「人が好き」でない人との違いがどこに由来するのかと考えてみると、幼いときからの生い立ち（育てられ方）が影響しているのではないかと私は直観している。

いったい、「人が好き」とか「仲良しになる」というこのパーソナリティは、どのようにして獲得されるのであろうか？あるいは「人が好き」にならないパーソナリティは、どうして「仲良しになる」力が弱いのであろうか？

この点について理論的に分析・検証しようとするとき、もう一人のアメリカの心理学者エリック・エリクソン（Erik Homburger Erikson, 1902-1994）の「ライフサイクル」論が有益な手がかりを与えてくれる。

「人が好き」「仲良しになる」という基本的な能力について、私はエリクソンの「基本的信頼」がその能力形成に大きく関わっていると考えている。

エリクソンは、人間とは生まれてから死ぬまで一生涯をかけて心理的・精神的に成長していく存在であるという。そして彼は、人間の心理的・精神的成長を「健康な人間が繰り返し乗り越えてゆく葛藤という観点から」<sup>21)</sup>捉えようとする「ライフサイクル」論を提唱する。それは、人間の一生をいくつかの時期（段階）に分け、健康で幸福な人間がたどる理想的な人生行程のモデルとして描かれている。そのモデルから外れると、その人の人生は幸福から遠ざかっていく。健康で幸福な人生を歩むためには、それぞれの段階を与えられた順番に歩んでいき、成長していかなければならない。エリクソンはその段階を8つの時期に分けている。「乳児期」「幼児期」「児童期」「学童期」「思春期・青年期」「成人期」「壮年期」「老年期」の8段階である。それぞれの時期に乗り越えなければならない課題があって、それが乗り越えられなかった場合は、老年期にいたるまでのどこかの時期で、人生の危機に見まわれ、課題をもう一度再経験しなければならない。（「引きこもり」はその危機的な状況の1つの反映と考えられる。）

私たちはここでエリクソンの「ライフサイクル」

表1 エリクソン「ライフサイクル・モデル」  
（佐々木正美『あなたは人生に感謝ができますか？』<sup>23)</sup>）

時期	年齢の目安	危機的な主題
乳児期	0～2 歳	「基本的信頼」の獲得。 人を自分を信じられるか
幼児期	2～4 歳	「自律性」を身につけること。 セルフ・コントロール
児童期	4～7 歳	「自主性」、積極性、主体性、目的性をはぐくむこと
学童期	7～12 歳	「勤勉性」の基礎づくり。 友達とのさまざまな共有経験
思春期・青年期	13～22 歳	「アイデンティティ」の形成。 自分を見出せるか
成人期	23～35 歳	「親密性」をもつこと。家族や同僚とのむすびつき
壮年期	36～55 歳	「世代性」を生きること。 引き継ぎと引き渡し
老年期	56 歳～	「人生の統合」。 人生に感謝ができるか

※年齢は目安。エリクソンが研究したときと現在では社会環境が異なり、単純な比較はできない

の8段階について簡単に一瞥しておこう<sup>22)</sup>。（次の表1はエリクソンの「ライフサイクル・モデル」である。）

①「乳児期」（0～2 歳）は母親を通して人間として「基本的信頼」（Basic Trust）を獲得することが課題となる。

②「幼児期」（2～4 歳）は排泄や食事を自分でコントロールする「自律性」（Autonomy）を身につける。

③「児童期」（4～7 歳）は「遊び」を通して物事にチャレンジする「自主性」（Initiative）を身につける。この「自主性」が抑圧されると「罪悪感」（Guilty）が強くなってしまう。

④「学童期」（7～12 歳）は小学校に通いながら新しい仲間や友だちとの関わりを経験しながら「勤勉性」（Industry 試行意欲）を身につける。これに

失敗すると「劣等感」(Inferiority)が強くなる。

⑤「思春期・青年期」(13～22歳)は「自分とは何か?」「自分は何がしたいのか?」「自分はどんな人間になりたいのか?」という問いのもとに「アイデンティティ」(Identity 自己同一性)の模索を行う段階である。

⑥「成人期」(23～35歳)は友人や異性との出会いを通して「親密性」(Intimacy)を育む時期である。これがうまくいかないと「孤独」(Isolation)を深めることになる。

⑦「壮年期」(36～55歳)は家庭で子どもを育てたり、職場で後輩を世話し育てるという「世代性」(Generativity 世話する心)を育む。こうした関心が持てないと、その人生は「停滞感」(Stagnation)に悩まされる。それは日本では「中年の危機」といわれる。彼は自分の人生をふり返り、自分のアイデンティティを問い直したり、青春時代の異性を懐かしく思い返したりする。

⑧「老年期」(56歳～)は自分の人生をふり返り、成功したことも失敗したことも、人生のすべてを受け容れようとする。あるいは、かつてできなかったことをもう一度経験し直そうとする。エリクソンはこの段階が果たすべき課題を「統合性」(Integrity)と名づける。人生のすべてを肯定し、あるがままの自分を肯定し、やがて訪れる死を受け容れようとするのである。

私たちは、このような「ライフサイクル」論の中で、最初の「乳児期」で獲得される「基本的信頼」に注目してみたい。

19世紀末から20世紀の初めころ、長期間家庭から引き離されて乳児院や養護施設で育てられた乳児は、精神的な発達が遅く、死亡率が高いことがドイツやアメリカで注目された<sup>24)</sup>。母親が赤ん坊をあやしたり、抱き上げたり、頬ずりしたりすることは、親としてごく自然な行為であるが、この「マザーリング」が不足すると、子どもの成長に重大な影響を及ぼすということなのである。エリクソンは、愛情深い両親に恵まれた乳児は幸せである。その子は「基

本的信頼」を獲得するからであると述べて、「基本的信頼はこの世の試練と人生の苦難から我々を守る一貫した支えである」<sup>25)</sup>と乳児期の「基本的信頼」の重要性を強調している。それが得られないときに生じる人に対する不信感は、「我々の人生のあらゆる側面を汚染し、他者との友情や愛情を我々から奪い取る」<sup>26)</sup>とエリクソンはいう。乳児期に人を信じることが、その後の人生において幸福な人間関係を作る原点になるということなのである。

乳児は自分の力では何もできない。コミュニケーションをとる術<sup>すべ</sup>もない。だから、泣いて訴える。オムツが濡れたら泣く、お乳がほしいと泣く、眠いから泣く、不安だから泣く、愛情がほしいから泣く。そうした訴えに、母親がそして周りの家族がそのつど応えてくれたら、乳児は安心して人を信頼する。しかし、泣いて訴えても充分に応えてもらえなければ、乳児の心は不信感に覆われ、人間関係を結ぶ芽が育たない。

エリクソンから多くを学んだという日本の児童精神科の医師佐々木正美は、著書『あなたは人生に感謝ができますか?』の中で、エリクソンがいう「基本的信頼」の中でも「喜びの分かち合い」<sup>27)</sup>が重要なのだと指摘している。乳児は、母親にそばにいてほしいだけでなく、あれこれと構ってほしいと泣く。構ってくれれば、乳児は喜び母親に笑顔を向ける。そして自分を喜ばせてくれた母親にも喜んでほしい。そこから、喜びを分かち合う感情が育つのだという。「喜びを共有しあう感情が、やがて……幸福を共有しようという意欲になります。……0歳から2歳ころの話ですよ」<sup>28)</sup>と佐々木正美が語っている。喜びを分かち合うことから、コミュニケーションが始まる。コミュニケーションとは言葉による会話ではない。人間関係で大切なのは、言葉を交わすことではなく、喜びや悲しみを交わすこと、分かち合うことである。それが本当のコミュニケーションである。「とおりがりに小さな子どもと目があうと、自然に笑顔を与えたくくなりますよね。それに対して子どもが笑顔を返してくれたら、こっちも喜びを感じ



じる。……そういう経験を無数にすることによって、喜びを分かち合うんです。」<sup>29)</sup>

「人が好き」「人と仲良しになれる」という健康で幸福な人間性は、エリクソンのいう「基本的信頼」によって培われる。乳児期の無意識的な親子関係が人間関係の基盤を作っていたのである。「人が好き」になれないとか「人との付き合いが下手」というのは、幼児期に「見捨てられた」「見放されていた」という経験の傷が(多い少ないの違いはあるにせよ)どこかに残っているということになる。

## 5. 寄り添う力

最近、多くの病院で、あるいは多くの看護師養成学校で、寄り添う看護の重要性が説かれている。そして、看護師に求められる力のうち最も重要な力の1つとして、「寄り添う力」が強調されている。私が勤めている鳥取看護大学の教育目標として「5つの看護力」が掲げられてあり、その1つが「寄り添う力」である。近代看護の基礎を築いたフローレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale, 1820-1910) も、その有名な著書『看護覚え書』(Notes on Nursing, 1860) において、看護師に求められる能力とは「他人の感情のただ中へ自己を投入する能力」であり、この能力がない人は看護から身を退いたほうがよい<sup>30)</sup>、と言っている。今日において、この「他人の感情のただ中へ自己を投入する能力」とは、患者の「心への共感」「寄り添い」という言葉におき換えられて理解されている。

看護師にとくに求められている「寄り添う」力とは、本質的に人間学的にどのような能力として理解し説明すればよいのであろうか。

「寄り添う」とは、イメージで言えば、その人と同じ方向を向いて、共に歩み、共に生きる喜びと悲しみを経験するということであろう。

### (1) シュタイナーの「傾聴」

そのために第一に求められる人間的資質 (基本的

姿勢) は何かと問われれば、私は「傾聴」だと考えている。通常、私たちは他人の意見を聞いたなら、それに対する感想や意見・批判を語るのが、賢明な知性の証明であると思っている。近代的な知性は「語る」ことに価値を感じている。しかし、(宗教的な思想も含めて) 人間が極めるべき精神性は「語る」ことではなく、「聞く」ことにあるという宗教思想的潮流がある。自分の主張や自分の考えを沈黙させて、ひたすら他者の話を聞く。この「傾聴」の重要性を強調した人に、ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) がいる。彼はドイツの哲学者・教育学者として知られているが、その思想内容は神秘体験をもとにして神的霊界を探ろうとする神智学の系譜に連なっている。シュタイナーが提唱する「傾聴」とは、人間の内なる魂の声を聴くための実践的な修行である。

シュタイナーは、全自然が人間にその秘密をささやいている、と言う。神秘学徒はそれを魂でもって「聞く」。それを「神秘行」と名づけている。「この修行のためには、自分自身の内なるものを完全に沈黙させる習慣をつける必要がある。」<sup>31)</sup>彼は自分の中の一切の合理的な意見を沈黙させ、拒否・反感や賛同の気持ちも沈黙させる。他人の言葉をまったく没我的に、自分の意見、自分の感じ方をすべて排除して、ひたすら「聴く」。そのように、「相手の言葉を聴く行為を通して相手の魂の中へ自己を移し入れる。」<sup>32)</sup>こうした「傾聴」によって、全自然がささやきかける「内なる語りかけ」が聴けるようになるのだ、とシュタイナーは言う。

### (2) 鈴木秀子の「アクティブ・リスニング」

シュタイナーの神秘的宗教的な「傾聴」をカウンセリングのためのコミュニケーション技法に応用したのが、「アクティブ・リスニング」(Active Listening, 訳せば「積極的な聞き方」つまり「傾聴」) である。

(その創始者はアメリカの臨床心理学者カール・ロジャース (Carl Ransom Rogers, 1902-1987) であるが、ここでは立ち入らない。)

「アクティブ・リスニング」を日本で精力的に普及させている人に、鈴木秀子女史（1932-）がいる。女史はもともと日本文学の研究者であるが、突然の事故による神秘体験（女史によれば「臨死体験」）を機縁として「コミュニオン」活動をはじめている<sup>33)</sup>。女史の『愛と癒しのコミュニオン』は、「アクティブ・リスニング」について非常に簡明で、しかも深く感銘に残る本である。その中で紹介されている話の1つ、「ドイツ人神父さんと犬」<sup>34)</sup>をここで紹介する。（本稿では、原文の1/2ほどに圧縮していることをお断りしておきたい。）

歳をとったドイツ人の神父さんに、「どうして神父さんになったのですか？」と聞いたことがあった。彼ははるかな遠い故国を眺めるようなまなざしで、こんな話をしてくれた。

彼はドイツの田舎で生まれた。家は教育関係者を輩出している名門だった。優秀な兄がいた。あまり出来のよくなかった彼は、いつも兄と比較され、「もっとがんばりなさい」といわれた。

小学校五年の夏休み前。終業式の帰り道、もらったばかりの通信簿を鞆から出し、おそろおそろ開いて見ると、落第点がいっぱいついている。そのうえ、親への呼び出し状が同封されている。足取りは重くなり、家に入るのもためらわれた。

その時、かわいがっている犬が飛んできた。少年は家に入らず、近くの野原に向かった。野原の真ん中に座りこむと、犬もそばにきて座り、少年の顔をじっと見あげている。全神経を少年に集中して座っているのだ。

少年は犬を抱きしめながら、ぼつりぼつりと語り始めた。

「ぼくはお兄ちゃんみたいに頭もよくないし、どんなにがんばっても勉強ができないんだ。……」犬は、ひたすら「世の中にこの少年しかいない」という目で見つめている。

「本当につらいんだ。先生に叱られて、『ご両親にこの手紙を渡しなさい』といわれて。お兄ちゃんみ

たいになりたいんだけど、できないんだ。お父さんもお母さんもわかってくれない。わかってくれるのはお前だけだよ」

「やってもできないことがどんなにつらいか、わかるよね。一生懸命がんばったのに、お母さんに叱られたり、『もっとやらなきゃ』といわれるんだ」

犬はじっと聞いている。少年は胸のうちの、ありったけを話しつづけた。そうしているうちに、何か胸がすうっとしてきて、もやもやが晴れてくるのだ。……

少年は、犬に心の内をすっかり聞いてもらおうと、……今度こそがんばろうと、明るく家路につけるのであった。

こんなに自分のことをわかってくれる者がいる。勉強ができるとかできないに関係なく、自分に対してこんなに忠誠と愛情を注ぎ、この世の中でいちばん大事な存在として扱ってくれる。

少年は、突然、天啓を受けたような感じを味わった。自分の中に力が満ち、動かしがたい確信が、丹田にしっかり位置を占めたのを知った。

「神様は自分を、こういうふうに見てくださる。」

それは少年なりの神体験だった。そして、一つの考えが自分の全身を貫き通すのを感じた。「自分と同じように悩んでいる人に、神様がこんなに愛してくれていることを伝えるのが自分の使命ではないか。」

こうして、少年は司祭の道を選び、終戦直後の日本にきて、苦しむ人を助ける道をえらんだのであった。

「あの時、自分の犬が苦しんでいる私と共にいてくれました。その犬に自分の気持ちを全部話してしまうと、不思議と自分は自分であっていいと思えるようになり、気持ちが楽になったのです。」

鈴木秀子女史が紹介するこの実話の中で、犬はただひたすら聞くだけの存在である。しかし、まさしく犬は少年に寄り添っている。犬は全身全霊を傾けて少年の話を聞いている。そして少年のすべてを受け入れている。「寄り添う」とは、全身を傾けて相手に聞き入り、相手の気持ちに寄り添い、相手のす

べてを受け入れることであると定義してよいであろう。積極的に助言を与えたり、質問をするわけでもない。ただひたすら聞き入る。そのように傾聴してくれる人がいることによって、悩める人は見えなかった自分の内面に気づき、自分で解決する糸口を見つける。そして魂の奥底から癒やされ、生きる力を得ることができる。

鈴木秀子女史は、「アクティブ・リスニング」とは「沈黙とあいづちによる受容的な聞き方」<sup>35)</sup>であると語っている。そこには、「批判しない」「同情しない」「教えようとしない」「評価しない」「ほめようとしない」という5つの原則<sup>36)</sup>がある。「干渉もなく、攻撃もなく、賞賛もないことで、人は受け入れられている満足感を得ることができる。何も言わないことが、実は重要なメッセージを伝えることになるのだ。」<sup>37)</sup>

#### 注

- 1) 「保健師助産師看護師法」, 第5条, 昭和23年法律第203号.
- 2) 平成9年「私立短期大学学生指導担当者研修会」において紹介された事例である。ここでは、あえて大学名は伏せておく。
- 3) マズロー『人間性の心理学』, 小口忠彦訳, 産業能率大学出版部, 1987年, 146頁.
- 4) マズロー『完全なる経営』, 金井壽宏監訳, 日本経済新聞出版社, 2001年, 419頁.
- 5) 前掲, マズロー『人間性の心理学』, 56-60頁. フランク・ゴープル『マズローの心理学』, 小口忠彦監訳, 産業能率大学出版部, 1972年, 61-63頁.
- 6) 前掲, マズロー『人間性の心理学』, 61-67頁. 前掲, フランク・ゴープル『マズローの心理学』, 63-64頁.
- 7) 前掲, マズロー『人間性の心理学』, 68-70頁. 前掲, フランク・ゴープル『マズローの心理学』, 64-67頁.
- 8) 前掲, マズロー『人間性の心理学』, 70-71頁. 前掲, フランク・ゴープル『マズローの心理学』, 67-68頁.
- 9) 前掲, マズロー『人間性の心理学』, 70頁. 前掲, フランク・ゴープル『マズローの心理学』, 68頁.
- 10) 前掲, マズロー『人間性の心理学』, 70頁. 前掲, フランク・ゴープル『マズローの心理学』, 68頁.
- 11) マズロー『完全なる人間』, 上田吉一訳, 誠信書房, 1998年, 33頁. 前掲, フランク・ゴープル『マズローの心理学』, 75頁.
- 12) 前掲, マズロー『完全なる人間』, 33頁. 前掲, フランク・ゴープル『マズローの心理学』, 75頁.
- 13) 若新雄純(人材・組織開発プロデューサー)「マズロー「自己実現」の誤解と「ありのまま」」, サイト「PRESIDENT Online」(<http://president.jp/articles/-/14339?page=2>)
- 14) 青木裕『成功するITマネージャーの「人づきあい術」』, IT media エンタープライズ, 2013年, 51-57頁.
- 15) 前掲書, 55頁.
- 16) 前掲書, 55頁.
- 17) 前掲書, 55頁.
- 18) 「日本看護系大学協議会」ホームページ, (<http://www.janpu.or.jp/kango/k01.html>)
- 19) 「看護師転職悩み」ホームページ, (<http://xn-cbkz88kytb2z1bvyky6pbuif.xyz/nayami/category2/entry61.html>)
- 20) 「世論時事社」ホームページ, (<http://www.seronjihou.co.jp/hutarinokangosi.html>)
- 21) エリック・エリクソン『アイデンティティとライフサイクル』, 西平直・中島由恵訳, 誠信書房, 2011年, 46頁.
- 22) 前掲, エリック・エリクソン『アイデンティティとライフサイクル』, 52-108頁. エリック・エリクソン『ライフサイクル, その完結』, 村瀬孝雄・近藤邦夫訳, みすず書房, 2001年, 153-165頁.
- 23) 佐々木正美『あなたは人生に感謝ができますか?』, 講談社, 2012年, 47頁.
- 24) 柏木恵子編著『よくわかる家族心理学』, ミネルヴァ書房, 2010年, 144頁.

- 25) 前掲, エリック・エリクソン『ライフサイクル, その完結』, 153 頁.
- 26) 前掲書, 153 頁.
- 27) 佐々木正美『あなたは人生に感謝ができますか?』, 72-84 頁.
- 28) 前掲書, 79 頁.
- 29) 前掲書, 73 頁.
- 30) フローレンス・ナイチンゲール『看護覚え書』, 薄井坦子・小玉香津子他訳, 現代社, 1975 年, 365 頁, 「ナイチンゲール著作集全 3 巻」第 1 巻所収.
- 31) ルドルフ・シュタイナー『いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか』, 高橋巖訳, ちくま学芸文庫, 2001 年, 62 頁.
- 32) 前掲書, 64 頁.
- 33) 鈴木秀子『死にゆく者からの言葉』, 文春文庫, 1996 年, 7-28 頁.
- 34) 鈴木秀子『愛と癒しのコミュニオン』, 文芸新書, 1999 年, 20-23 頁.
- 35) 前掲書, 55 頁.
- 36) 前掲書, 27 頁.
- 37) 前掲書, 55 頁.